

櫻園通信 39. 平成 28 年 7 月
 東京都健康長寿医療センター
 養育院・渋沢記念コーナー
 連絡先: 老年学情報センター
 稲松孝思

養育院大塚本院時代の渋沢栄一

渋沢栄一は、明治維新後の日本の代表的な経済人で、日本型資本主義の父ともいわれます。若いころから社会事業にも熱心であったことが近年大きく再評価され、多数の書籍が出版されています。図-1は、病院敷地にある渋沢栄一の大きな銅像で、昨年板橋区の有形文化財に登録されていますが、渋沢が半世紀以上養育院事業に関わったことを顕彰し、東京市民の寄付で建てられたものです。養育院事業は、渋沢の代表的な社会事業ですが、その養育院の歴史の中で、大塚・巣鴨を拠点としていた明治の後半から大正時代にかけての養育院は日本の医療・福祉体制に大きな役割を果たしています。



● 渋沢栄一の生涯

渋沢栄一の生涯を図2にまとめてみました。生地は埼玉県の深谷で、藍も商う豪農の長男で、今日でも大きな屋敷が残されています。栄一は、若いころ尊王攘夷運動の熱気の中にいましたが、いろいろな事情で徳川慶喜の一橋家に仕官して武士となり、慶喜の將軍任命に伴い、幕臣となりました。身分制度の厳しい江戸時代に、農民が幕臣になるということは大変なことで、大出世と言えるでしょう。さらに、パリで行われる万国博覧会の江戸幕府の將軍の名代として万博に徳川昭武が派遣されますが、ヨーロッパの王室から国賓待遇を受けています。その使節団の会計掛として、渋沢は2年近くヨーロッパ生活を体験します。しかし、その最中に幕府が崩壊したため、帰国しています。静岡で、謹慎中の徳川慶喜に報告に行くのですが、この時、駿府藩中老として徳川家を差配する大久保一翁に出会っています。その出会いが、その後の渋沢の運命を大きく展開させたのです。

渋沢栄一とは？

- ・ 埼玉の豪農、一橋家に仕官、武士・幕臣に
- ・ 1867年、パリ万博使節団の会計庶務担当
 - 静岡の徳川慶喜へパリ帰朝報告、会計報告
 - 大久保一翁に会い→商法会所
- ・ 明治2～6年、明治政府改正掛など(井上馨の懐刀)
- ・ 府知事: 大久保一翁に営繕会議所の運用を託され、養育院事業、ガス事業に関与
- ・ 日本資本主義の父
 - 第一国立銀行、王子製紙など500を超える企業に関与
 - 論語と算盤を標榜に経済活動
- ・ 若いころから60以上の社会事業に関与
 - 福祉・医療: 養育院、慈恵会、済生会、赤十字運動、聖路加...
 - 商業教育・女性教育: 一橋大、女学館、日本女子大
 - 国際協力: 対米、対仏
- ・ 70歳以降は、実業界から引退し、各種の社会・公共事業にひろく関係した。



当時、静岡の徳川家は「太政官札」という政府紙幣(不換紙幣)を大量に抱えていました。その処理について、渋沢は民間資本を合本して商法会所を設立し、産業振興に役立てることを提言しました。そして、商法会所の運営を実行し、大きな利益を上げています。その能力を買われてか、明治政府に招かれ、大蔵省に入省。改正掛(維新政府のシンクタンク)を立ち上げて明治維新の様々な経済改革に尽力することになるのです。その中で人脈もでき、第一国立銀行(現在のみずほ銀行)という日本最初の銀行を創り頭取に就任し、成功を収めました。最終的には、約500社を超える会社の設立に関係することになり、日本型資本主義の父と言われました。

● 養育院と白河楽翁・大久保一翁・渋沢栄一

その渋沢が、若い頃から大変熱心に養育院に関わるのです。そのきっかけは当時東京府知事であった大久保一翁に、七分積金の管理と活用を命じられたことにあります。大久保一翁は、幕府の目付海防係(蕃書調所総裁を兼務)だったときに幕閣に提案した、西洋風の幼院・病院設置プランに基づいて、明治になってから養育院、東京府病院を設立しています。後にその養育院の運営を渋沢に託したのです。

時代は遡りますが、江戸時代の寛政年間に老中松平定信(白河楽翁)は、「七分積金・町会所」の制度を立ち上げ、貧民救済に当たっています。町の地主階級から集金した基金を貧民の生活援助にあてたのです。これは社会福祉事業として、

養育院とは？



- ・ 明治維新後、松平定信の作った七分積金を用いて、臨時的救貧施設(三田、麴町教育所)を運営。
- ・ 大久保一翁府知事の諮問への救貧三策の答申により恒久施設を計画。
- ・ ロシアのアレクセイ大公の来朝を機に、加賀藩上屋敷に臨時収容(明治5年10月15日)
- ・ 上野の護国院に恒久的な救貧施設として養育院を開院(明治6年2月12日)。
- ・ 『論語と算盤』を標榜する経済人・渋沢栄一が半世紀以上にわたってその維持発展に尽力した。

世界的にも極めて早い時期の成功例といわれています。その「七分積金」が、明治維新の際に、幕府から明治政府に渡されました。江戸開城時に任にあった大久保一翁が東征大総督府に、もともと市民を救済するための資金ということで渡したそうです

その後幕府の徳川家は静岡の一大名に移封になり、その立ち上げに大久保一翁や勝海舟が働くことになります。しかし、明治5年に廃藩置県になると、大久保一翁は徳川家達と共に上京を命ぜられます。文部省二等出仕、次いで東京府知事に任ぜられます。その時、貧民救済のために上野の護国院(現東京芸術大学)に恒久的な救貧施設を作りましたが、その仮施設として加賀藩上屋敷跡の長屋に浮浪者を収容しました。その後、大久保府知事は、七分積み金(共有金)の運用、養育院の維持管理を渋沢栄一に託します。このようにして、「論語とそろばん」を標榜する経済人の渋沢が、社会事業としては養育院の維持・運営に力を注ぎ、他の社会事業にも関わるようになるのです。

なお、渋沢は、共有金の多くをガス灯会社の設立にもあてています。当時の東京は夜になると真っ暗ですから、ロンドン・パリのように光り輝く街にしたい、東京に街灯を造ろうという志を立てて、共有金を使用しています。こうして、渋沢は、早い時期から養育院に大変関心を持ち、社会公共事業に幅広く尽くしていきました。養育院事業への関与をきっかけとして、慈恵会(東京府病院が払い下げられた)、済生会、赤十字運動、女子教育の学校設立などの社会事業、教育事業にも携わりました。70歳からは実業界から引退していますが、引退後も各種の社会公共事業には、91歳で死亡するまで関わりつづけました。

●養育院の冬の時代

養育院は、初めは本郷の加賀藩長屋あと(現在の東京大学)を仮施設として浮浪者を収容していますが、明治6年2月に上野(現在の東京芸大)に恒久施設を建てています。この場所が東京美術学校や、上野の博物館、上野公園になると、その後の養育院は、神田、本所、大塚、板橋と転々としています。大塚に本院が建つ前、養育院は厳しい状況におかれました。

当時の経済学者が「貧民のために税金を充てるのは無駄である」と提議したのです。現在でも「生活保護制度は、受給者を怠けさせる」と意見する人がいます。そのような考え方から「養育院に税金を使うな」という意見が、強く出されたのです。それに対し、渋沢は、一生懸命寄付を集めて維持を計ったのですが、税金が絶たれたため、施設は維持が困難になり潰れそうになります。そこで、公営化を求める建議書を出し、養育院運営は東京市が担うこととなり、再び公営化されたのです。

加えて、施設が各所を移転することは、良くないと指摘されました。ヨーロッパには大きな慈善施設があり、大日本帝国にも、それ相応の施設を設置すべきという意見が出され、大塚の養育院本院が建設されたのです。古い地図では、大塚の本院と巣鴨の分院、精神病院の巣鴨病院は、広い意味での巣鴨村一帯に点在していたということになります。明治19年にできた大塚の養育院本院の絵図、写真を示しますが、現在の大塚病院、監察医務院、大塚公園を含む広大な土地に建てられた立派なものです。

“養育院”とは

精神病、ハンセン氏病、児童福祉、高齢者福祉などで専門の施設に発展し、そのことが、日本の医療・福祉の歴史になっている。

本郷(1872~)⇒
上野(1873~)⇒
神田(1879~)⇒
本所(1885~)⇒
大塚(1896~)⇒
板橋(1923~2000)

- ・時代の求めに応じて、医療・福祉事業を展開
 - 狂人病室設置(明8)⇒ 癡狂院 ⇒ 巣鴨病院 ⇒ 松沢病院
 - 捨児・迷子の養育(明18) 里親・職親制度、児教育、幼童室 ⇒ 巣鴨分院 ⇒ 石神井学園
 - 回春室:ハンセン病(明32) ⇒ 多摩全生園、長島愛生園など
 - 結核病室(明22)⇒ 勝山保養所、安房分院、板橋分院
 - 感化部(明38)⇒ 井の頭学校 ⇒ 萩山実務学校、八街学園
 - 安房臨海保養所・分院(明33): 虚弱児 ⇒ 船形学園、
 - 長浦更正農場(昭17): 障害児 ⇒ 千葉福祉園
 - 看護養成所(明29) ⇒ 板橋看護専門学校

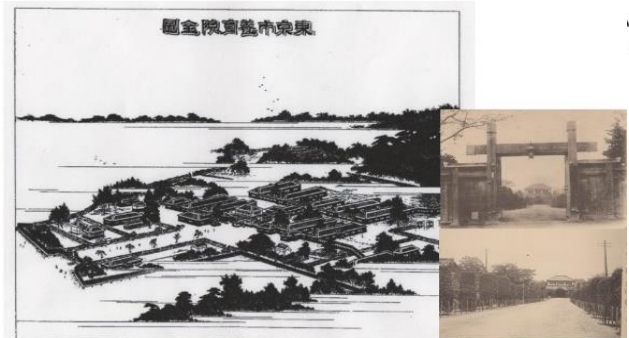
養育院、冬の時代

- ◆経済学者の田口卯吉らが「税金を使って、貧乏で働けない人を養育することは怠け者を作ることになり、税金で養うべきではない」と議論した。
- ◆渋沢栄一は、政治は論語でいう仁に基いて行なうのは当然であると公言で続けることを主張したが、結果的に税の支出が止められ、委任経営。



渋沢院長の公営化を求める建議書

- ◆必死に委任経営で支え、それでも訴え続けて、やっと東京市営になったの



- ・現在の大塚病院、監察医務院、大塚公園

●養育院の大塚本院。巣鴨分院時代

養育院は、この大塚に開院した時代に、日本の医療・福祉史上、大変重要な事業を成し得ました。それまでの養育院は、捨て子や高齢者など、あらゆる状況の困窮者をひとまとめに收容した施設でしたが、それぞれの收容者の必要に応じて、分化されていきました。そして、精神病、ハンセン病、結核、浮浪児の感化教育、高齢者福祉などの専門福祉施設に発展しました。日本の医療・福祉体制の変化を体現してきたわけで、福祉の原点と言える組織なのです。これが、大塚の本院時代の養育院の仕事だったのです。

養育院の機能分化の始まりは、古くは、精神障害の方に対しては狂人病室を設け、これが、上野から移転するときに東京府病院に移管されて癲狂院(てんきょういん)となり、巣鴨病院、それから現在の松沢病院へと発展してゆきました。また、児童の処遇では、捨て子とか家庭に問題のある子のうち元気な子は、大塚本院から巣鴨分院を独立させ、やがて石神井学園へと事業を引き継ぐこととなります。結核の患者に対しては、板橋の分院を設置しました。ハンセン病患者に対しては、回春病室を設置し、多摩全生園へと発展していきました。浮浪少年の扱いも、初めは大塚の本院で処遇していましたが、周囲の患者の悪影響を避けるために巣鴨分院、井の頭学校で対応することにしました。このように、患者のニーズに応じて、より専門的に対応するために、分類処遇を行なっていたのが「大塚・巣鴨時代の養育院」と言えます。

なお、巣鴨地域に真宗東本願寺系の大学がありましたが、養育院の巣鴨分院は、この学校を買い取って作った施設で、明治42年に大塚本院から独立して問題児童の処遇のために独立させた施設です。ある時期、ここが養育院のシンボリックな施設になり、高松宮や皇族の方々が訪問されました。現在は、石神井公園の方に移転し、福祉事業団・石神井学園として運営されています。巣鴨から石神井に移転する際に運んだ2つの石碑が残されていますが、巣鴨分院で育った子供が、成長して石屋職人になって社会人として自立し、その恩義を感じて、寄付したものです。

このように「大塚・巣鴨時代」に養育院は精力的な活動を行っていたのですが、徐々に周囲に民家が建つようになり、町の中で施設を維持することが難しくなってきました。加えて、取り扱う医療・福祉分野の規模も拡大し、施設の敷地も狭くなり、建物も老朽化してきました。そこで、板橋へ移転するべく工事をしていたのですが、その矢先の大正11年、関東大震災が起きて、建物が倒壊。板橋の建設工事を急ぎ、急遽、板橋の大山に移転したのです。

●渋沢栄一を支えた人たち●

◇安達憲忠

「大塚・巣鴨時代」に養育院の活動を担ったひと達について述べます。渋沢は、実業家として多忙なため、実際の組織運営は、安達憲忠と田中太郎らが行ないました。彼らは、渋沢を補佐して社会事業に邁進した人物です。東京市の運営する大塚の養育院本院を舞台に、幹事として実質的な企画・運営を行い、回春病室、安房分院、巣鴨分院、井の頭学校、板橋分院の創設などに尽力しました。渋沢は、時間を割いて、月に1回は必ず養育院に顔を出しました。安達が社会事業を企画し、運営の実務をこなす。一方、渋沢が政治的な仕組みづくりと資金集めをするという、二人三脚で運営したようです。安達がいたから渋沢が活動できたし、渋沢がいたから安達が活躍できたという関係だろうと思います。

安達憲忠は、安政四年に岡山県に生まれました。幼少期に母親を亡く、親戚の天台宗寺院で育ち、仏教を修め、明治期に

養育院・大塚本院

(明治29.3.31.~大正12.9.20.)

- ・ 明治23.養育院は委任経営から東京市の経営へ
- ・ 明治29.本所から大塚への引越し
- ・ 混住から分類処遇 ⇒ 専門施設へ
 - 虚弱児童: 安房分院: 明治33.8.5.
 - 感化生: 感化部: 明治33.7.22. ⇒ 井の頭学校 M38.10.29., 萩山学校
 - ハンセン病: 回春室: 明治.36.4. ⇒ 全生病院
 - 児童: 巣鴨分院: 明治41.4. ⇒ 石神井学園
 - 結核: 板橋分院: 明治3.10. ⇒ 板橋本院
- ・ 大正12.9.1.関東大震災で崩壊



養育院と安達憲忠

渋沢を補佐して社会事業に邁進し、東京市の運営となった大塚の養育院を舞台に、実質的な企画運営を担い、回春病室、井の頭学校、安房分院、巣鴨分院、板橋分院の創設等にかかわり、養育院の発展に尽力。



1919(大正8年)年退職するまで、安達が企画し、渋沢が政治的な仕組み作りと資金集めを行い、安達が運営の実務をこなすと言う二人三脚とも言える形であったようだ。



安達憲忠

- ・ 1857年、岡山県で生まれる。幼時、母と死別
- ・ 遠威の天台宗寺院で育ち、仏教を修める一方、岡山の藩校遠芳館で経学を学ぶ。
- ・ 新聞記者となり、山陽新報、中国日々新聞、福島新聞などの記者を務める傍ら、自由民権運動に携わり、「岡山自由党の四天王の一人」。また、集会条例違反で逮捕された事もある。
- ・ その後上京し、1887(明治20年)、林徽音20歳と結婚。
- ・ 1888年、東京府に奉職する。
- ・ 東京市養育院院長であった渋沢栄一の勧めで、1892年、明治24年、養育院幹事となる。
- ・ 渋沢栄一の補佐役として、養育院運営の実務を担当
- ・ 1919年、スキャンダルで養育院を退職する。
- ・ 報徳会、上宮教会などに関与
- ・ 1930年12月2日死去。享年74。



新聞記者となって、自由民権運動にかり逮捕されるという波乱の人生を歩んでいます。自由民権運動がらみで福島から逃れて上京、漢学の先生の元でアルバイトをし、その娘と結婚しました。結婚して無職では困るため、東京市に奉職しました。実は、彼の妻の林徽音は、日本で最初にヨーロッパ看護学を勉強した方です。「拜志(はいし)よしね」と名乗り、明治二十年に東京慈恵医院看護婦教育所に入り、学生時代に養育院の大塚本院にいた安達と結婚しました。新婚早々、那須セイとイギリスに渡り、日本初の看護婦留学生としてロンドンの看護婦学校で学びました。フローレンス・ナイチンゲールのいた病院です。東京慈恵医院の高木兼寛が、留学をすすめ、若い看護婦2人を海外へ送り出したそうです。そのうちの1人が新婚ホヤホヤだと思っていたかどうかはわかりませんが…。安達は、林徽音が留学中、東京都に勤務していましたが、その折に渋谷から、養育院の管理を引き受けました。林徽音は帰国後東京慈恵医院で看護長兼手術室係などを務めました。安達憲忠は養育院で忙しく、彼女は看護業務で忙しい。親戚の記録によると、夫婦共に多忙で、一緒に過ごせたのは、日曜・祭日のみだったそうです。林徽音は、明治25年、27歳の時に結核で亡くなりました。おそらく、安達憲忠は、彼女のことを思いながら、一生懸命に福祉の仕事に打込んだのでしょう。

◇入沢達吉

また、養育院の発展に貢献した人物に、入沢達吉がいます。東京帝国大学から派遣されて、養育院の医長を兼任していた医師ですが、この人が養育院の医学的な発展に大きな影響を与えました。ここでお年寄りを診断した経験を生かし、大学に戻ってから「老人病学」という老人医療専門書を出版しました。世界的に見ても「老人病学」という言葉を、極めて早い時期に用いた本と評価されています。現在読み返してみても、諸外国の引用が多く見られる、レベルの高い教科書です。彼は、東京帝大のベルツが退職したあとを継いで教授になって、日本の内科学を確立しました。日本医学会の会長なども務めています。医学史、米ぬかエキスが脚気に効くなど、様々な研究成果を残しています。助教授時代、元気がない虚弱な子どもは臨海学校施設で育てたほうがいいのかと指摘し、房総に施設建設を算段したことも、大きな成果です

入沢達吉 1865-1938(慶応1-昭和13)

新潟県生れ。東大で、ベルツに内科学を学び、ドイツに留学したのち、宮内省侍医局勤務。足尾銅山鉱毒事件に委員として参画。
1895年東大助教授。
1897～1902年養育院医長兼任。
安房分院、板橋分院などで、結核対策に尽力。養育院体験を元に『老人病学』出版、老人病学の草分けとなる。
1901年ベルツ退職のあとを受けて帝大教授となり入沢内科を創始。主宰すること24年に及び、日本内科学の確立に貢献。



◇光田謙輔

また、光田健輔という医師がいました。山口のひとで、済生学舎を野口英世とほぼ同じ時期に卒業しています。医師開業試験に合格し、東京帝大病理の山際勝三郎の研究室に入り、養育院に派遣されました。山際勝三郎は、ウサギの耳にタールによる人工癌を発生させることに成功した人物です。光田健輔は養育院にきてから、ハンセン病の勉強を一生懸命し、感染症対策として回春病室という隔離病室を作りました。また、養育院にとって大きな功績は、大学から1年、2年と短期間で派遣されてくる若い研修医師を、光田が指導したことでした。さらに、養育院の「大塚・巣鴨時代」に、日本で極めて早い時期の看護教育の責任者を務めています。彼は、明治41年に多摩全生園の副医長として栄転しています。ハンセン病対策に活躍し、後に文化勲章を受賞、新聞では「東洋のシュバイツァー」と褒めたたえられていました。渋谷が彼を政治的に支援することで、日本におけるハンセン病患者隔離制度が確立しました。ところが戦後になって、ハンセン病の原因菌に対する治療薬が導入され、隔離の必要性が薄れ、彼が引退したあとも、国はその隔離政策を変えることができませんでした。このことがハンセン病患者の国家による差別問題と指摘されました。このため、光田はハンセン病撲滅に力を尽した人物と評価される一方、こうした人権問題の元凶と批判する人もおり、現代において光田を評価するには複雑な面もあります。

光田健輔 1876-1964(明治9-昭和39)

- ・ 明治9年(1876)山口県(現・防府市)生れ
- ・ 明治28～29年(1896)済生学舎。(野口英世と同時期)
- ・ 医業開業試験に合格
- ・ 明治31年、東京帝大病理撰科(山際勝三郎教授)、
- ・ 東京市養育院派遣(癩患者に接し、癩病に関心をもち、同院内に癩患者専用の〈回春病室〉を設営した。
- ・ 養育院では入沢達吉に内科臨床医学の手ほどき
- ・ 大学派遣の若手医師指導
- ・ 看護婦陽性の任にあり
- ・ 明治38年養育院医員、明治41年副医長



光田健輔

- ・ ハンセン病対策を渋谷の元で推進:東京銀行クラブで講演
- ・ 明治42年全生病院院長、昭和5年、国立療養所長島愛生園園長
- ・ 光田反応など癩医学の面での業績も多い
- ・ 日本の救らい事業に尽くす
- ・ 昭和9年、日本癩学会会長、
- ・ 昭和26年文化勲章
- ・ 昭和35年、ダミアン ダットン賞
- ・ 昭和39年逝去



養育院の古参医員として、若手医師教育、看護婦教育、安房分院、結核対策など安達憲忠と共に養育院の運営に尽くす

後にハンセン病隔離論者として、一部から批判

●まとめ

まとめますと、渋谷栄一は、安達憲忠、入沢達吉、光田健輔や、後任の田中太郎らとともに、日本の医療・福祉の歴史において大きな功績を残してきました。その養育院事業を大きく発展させた場所が、大塚と巣鴨の一帯でした。鰥寡孤独(カンカコドク)の窮民の混住状態を分類処遇し、今日の日本における専門福祉施設の創設など、日本の医療・福祉体制の原点はこの地にあったのです。

